

# 思春期のチャムシップ経験が現在の自己開示傾向に及ぼす影響

## — 自己開示抵抗感、アレキシサイミア傾向に注目しての検討 —

南 浦 由 佳

### 1. 問題と目的

本研究では、思春期におけるChumship体験と自己開示の適切性、自己開示の抑制態度、アレキシサイミア傾向との関連を検討することとした。

### 2. 方 法

- 1) 調査対象者 大学生509名（男性246名、女性263名、平均19.36歳、 $SD=1.18$ ）
- 2) 調査内容 ①適切・不適切な自己開示尺度（森脇ら，2002）②親しい他者に対するストレス開示抑制態度尺度（兪ら，2013）「弱みの隠蔽」「あきらめ」「相手への配慮」「自己解消」「気晴らし希求」の4因子。③Chumship体験尺度（須藤，2003）前青年期の親密な同性友人関係の特徴を測定するため、「協同的自己開示」「理想化」「独占性」の3因子。④TAS-20（小牧ら，2003）アレキシサイミア傾向を測定し、「感情同定困難」「感情描写困難」「外面志向認知」の3因子。

### 3. 結 果

因子分析では適切・不適切な自己開示尺度は「聞き手選択」「聞き手無配慮選択」の2因子が除外され、5因子を抽出した。ストレス開示抑制態度尺度、Chumship体験尺度、TAS-20尺度は先行研究と同じ因子を抽出した。

Chumshipを要因とする各尺度への影響を検討した分散分析では、協同的自己開示体験と理想化体験が少ないほど自己開示のあきらめを抱きやすくなり、特に協同的自己開示体験においてはアレキシサイミア傾向も高くなることが明らかになった（協同的自己開示：あきらめ・感情描写困難・TAS合計 $F=4.52\sim 14.46$ ,  $p<.05$ 、理想化：あきらめ $F=4.52$ ,  $p<.05$ ）。そして、不適切な自己開示傾向とアレキシサイミア傾向も高くなることも明らかになった（ネガティビティ・無配慮・相手への配慮・感情同定困難・外面志向認知・TAS合計 $F=3.26\sim 10.97$ ,  $p<.05$ ）。

共分散構造分析による因果モデルの検討では、Chumship体験から自己開示抑制態度へ直接的な影響があるのではなく、Chumship体験からアレキシサイミア傾向へ影響し、アレキシサイミア傾向から自己開示抑制態度へ影響が与えられているというモデルが明らかになった。また、協同的自己開示はアレキシサイミアに負の影響、理想化、独占性は正の影響を与えることが明らかになった。

### 4. 考 察

本研究の結果からChumship体験のうち、協同的自己開示体験が多いとアレキシサイミア傾向を減少させ、そして自己開示の抑制態度を抑えるというモデルが示唆された。そして、過度に相手を独占、理想化する体験は、ネガティブな友人関係を築く可能性が示唆された。